

然のルールと見なしていた。それだけ日本が貧しかったということだ。

それが日本が豊かになったら、みんなAして、自己利益の追求をすることができるようになった。人のことなんか顧慮せず、われひとりよげれば、それでいいという時代になった。そういう不人情な時代になったのは、競争に負けて社会の下層に落ちた人間でもとりあえず食っていける保証があったからですね。負けても、命まで取られるわけじゃないと思うから、※4 リスクヘッジも考えずに、あるかぎりを勝負につき込むことができる。だから、手銭がかつかつでも、平気な顔で勝ち負けを競う。そんな時代がずっと続いてきた。

今、社会の情勢が変わった。というのは、勝負に負けた人間にはもう這い上がるチャンスが巡ってこないんじゃないか、うっかりすると路頭に迷うことになるんじゃないかという不安が深まってきたからです。

日本が例外的に豊かで安全だった時代が終わった。「※5 ラットレース」は勝ったものの総取りで、負けた人間には何も与えないというルールでやっていたら、本当に飢え死する可能性が出てきた。そういうことです。そこで初めて「ルールの変更をしよう」という話になったわけです。

B 原理は豊かな社会向きルールなのです。「晴天型」の※6 スキームなんです。資源が貧しくなってきた、分け合う人間の数が増えてくると、それはもう使えない。感じている人はもうそのことを感じている。

3 今二〇歳の子たちは、あと六〇年くらい生きるつもりではいると思うのですが、この子たちは、これからの日本が今より豊かになるとはたぶん期待していません。ましてやバブル経済が再来するなんて思っていない。たぶん日本はゆっくりと貧しく、あまり活気のない国になってゆく。残された、有限の資源をどうやってみんなでフェアに分配し、効率的に使い回していくかというこの方に知恵を使わなくちゃいけないということが、わかってきた。それを僕は先ほど「潮目の変化」と呼んだのです。

資源の乏しい環境で、支え合って共に生きるための生活原理はわりとシンプルなものなんです。エコロジカル・ニッチ、「生態学的地位」をできるだけばらけるようにすることです。限られた資源を複数の個体で分け合うためには、行動パターンを変えなくちゃいけない。動物はそうしています。同じエリアに何百種類もの動物がCして、資源を分配するためには、4 生き方を変えなくちゃいけない。あるものは夜行性になり、あるものは昼行性になる。あるものは樹上で生活し、あるものは地下で生活する。あるものは肉食であるものは草食である。あるものは大きく、あるものは小さい。そういうふうに生態学的な地位をずらしていく。ずらしていったら、「かぶらない」ようにする。限られた資源を最大限に利用する方法はそれしかないんです。できるだけ類似したふるまいをしない。同一物に欲望が集中しないようにする。D 相手を押しのけて奪い取らないと生き延びられないというような生き方をしない。それがEの原理なんです。

今の若い人たちを見ると、たしかにそういう方向に微妙に生き方をシフトしているように僕には見えます。そういうふうにいるいろいろな個性を持った、「余人を以ては代え難い」人たちが、それぞれの特技を生かして相互支援・相互扶助できるゆるやかなネットワークを形成しようとしている。そんな感じがします。(内田樹『最終講義——生き延びるための六講』)

注釈

※1 「関川夏央」…日本の評論家・小説家。

※2 「小津安二郎」…日本の映画監督。

※3 「岡田茉莉子」…日本の女優。

※4 「リスクヘッジ」…損失を回避すること。

※5 「ラットレース」…働いても一向に資産が貯まらないような状態。また、そのような競争。

※6 「スキーム」…計画。

問一 空欄《X》《Y》に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし記号は一度しか使えないものとする。

ア だとしたら イ ですから ウ だとしても エ でも

問二 空欄A、Eには、(ア)「共生」、(イ)「競争」のいずれかが入る。当てはまる言葉として最も適切なものを、(ア)・(イ)からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部1「不安が深まってきた」とあるが、それは何がなくなつたからか。本文中から二十五字程度で探し、始めと終わりの五字を抜き出しなさい。

問四 傍線部2「晴天」とあるが、この言葉が示す内容に最も近いものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一九五〇年代 イ バブル経済 ウ 今 エ これからの日本

〔注意〕解答はすべて別紙解答用紙に記入し、問題も提出すること。

平成二十九年二月十日実施 鶴沼高等学校

(問題は3ページへ続く)

問五 傍線部3「今二〇歳の子たち」とあるが、彼らに見られる傾向として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ちよつとでも余裕があるものは、それを独占しない。 イ 手銭がかつかつでも、平気な顔で勝ち負けを競う。
ウ あるものは夜行性になり、あるものは昼行性になる。 エ できるだけ他者と類似したふるまいをしない。

問六 傍線部4「生き方」とあるが、これとほぼ同じ意味で用いられている言葉を、本文中から十字で抜き出さない。

問七 次のA～Dを生じた順番に並べたものとして最も適切なものを、後の選択肢ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- A 限られた資源を効率的に使い回すことに知恵を使うべきだという考え方。
B 限られた資源をみんなで使用回すことは当然だという考え方。
C 勝負に負けると路頭に迷うことになるかもしれないと危惧する考え方。
D 他人のことなんか顧慮せず、自分ひとりよげればそれでいいという考え方。
(選択肢) ア B↓D↓C↓A イ A↓B↓D↓C ウ D↓C↓A↓B エ C↓A↓B↓D

「三」次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

北海道の分校に通う中学一年生の憲太と学。小学生の頃は毎日のように一緒に遊んでいたが、中学の入学式以降、学は勉強に明け暮れ、憲太にそっけない態度をとるようになっていた。そんな学と以前のように笑い合いたいと期待を込めて誘った『夜空を見る会』であったが、学は会場である分校に着いてすぐにどこかへ行ってしまった。校舎中を探し回り、図書館にいる学を見つけた憲太は声を荒げ、学を問い詰めた。そこで目にしたのは泣きそうになっている学の姿だった。

学がべそをかき顔なんて、いつぶりに見ただろう？ 見たとしたらたぶん、小学校に上がる前だ。学と聞いて憲太が頭に浮かべる彼の表情は、最近では暗記カードや教科書などを覗みつけるようにしているものと、いかにも頭脳明晰そうにまっすぐ前を見つめる横顔、それから、こちらを振り向いて心底嬉しげに笑う顔——それらだ。

「おい……おまえ」

「わかるわけないよ……憲太は、両親もおじいさんもおばあさんも、ずっとこの村じゃないか。でも僕は違う。親が勝手に……田舎に変な夢抱いて、こんな村に来て」

村おこしの一環として、十数年前に農地を無償で貸し出すと都会から若夫婦を誘致したのは、憲太の祖父の策だった。

「うちの親がそのまま都会にいてくれたら、僕の今はきつと違ってた。こんな村じゃ、十分な勉強なんてできない。札幌や大きな街の子は、なんの苦勞もなく進学塾や予備校に通っている。ネットの授業配信も、もう少し先だっていうし」

泣きべその理由を推しはかりながら、憲太は学をとりあえず励ましてみた。

「でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」

「どこがだよ！」

大声を出した学の頬を伝い、細い顎の先からしずくが落ちる。「成績は下がったんだよ、僕は僕なりにやったつもりだったのに……僕より上のやつらは、みんな都会の子だった。彼らと同じことをやれたら、絶対負けなかったのに」

学は顎を手の甲で拭いながら、進学塾のテキストを拾い上げた。

「環境が違うんだ、勉強する環境が……こんなに田舎にいるって、それだけですこいハンデだ。このままなら、きつとこれからもどんどん成績は下がる。成績が下がれば、望む高校に行けないかもしれない、大学にだって」

そして、苦しげに絞り出すような声で、こう断じた。

「真っ暗だ。生田羽村が、僕の未来を閉ざすんだ」

ああそうか——憲太はA眸に落ちた——こいつは悔しいんだ。悔しくて泣いているんだ。自分ではどうにもならないことが自分を邪魔していると信じ込んで。

眼鏡を外して肘をつき、両手で顔を覆って、学はどうとう嗚咽した。憲太は暗さにまぎれてしまいそうな彼のつむじを、しばらく覗んだ。

「……だっせ。めそめそしやがって」

口から出た声は、憲太自身も驚くほどに低かった。

「おまえの未来って、なんだよ」

その低さで、2内にくすぶる怒りを憲太は自覚した。学も異変を悟ったのか顔を上げた。

(問題は4ページへ続く)

「注意」解答はすべて別紙解答用紙に記入し、問題も提出すること。

平成二十九年二月十日実施 鶴沼高等学校

「どんな未来がお望みなんだよ、言ってみろよ、おい」

そういえば、学の将来の夢を憲太は知らないのだった。憲太も教えていなかった。というか、真面目に考えたことがなかった。学校でそういった課題の作文を書かされたこともなかった。

学の未来については、村の大人たちが口々に好き勝手なことを語るのを耳にするだけだった。

「……医師」

学も低い声で一言答えた。

「は？ イシ？」

「医師。お医者さんだよ、久松先生みたいな」

子どものころから世話になつていいる、穏やかで優しいおじいさん先生の像が、憲太の頭の中で結ばれた。

また雷が連続して落ちた。学の喉が、ひゅつと鳴った。

なるほど、医者なら難しいだろう。難しくなければ困る。人の命を預かる仕事なのだから。でも。

「俺、今のおまえみたいなお医者さんなら、診てほしくない。ほんとマジ、絶対やだね」

雷が落ちたみたいに、学の体がびくつとなつた。憲太はたたみかけた。「だつて今のおまえなら、手術失敗しても、器具が悪かったとか、とにかく上手くいかなかったら周りのせいにしようじゃん」

「なんだつて？」

学が眉をすり上げて席を立ち、上目遣いでねめつてきたが、憲太は動じなかった。

「おまえ、さつき言ったこと忘れたのかよ？ 自分の成績が落ちたのを生田羽村のせいにしてただろ。こんな田舎だから駄目なんだつてさ」

右手が勝手に動いて、向かい合う学の肩を掴んでいた。

「バックじゃねえの？ 久松先生だつてこの村の出身だぞ。そりゃたしかにここは田舎だよ。でも、それだけの理由でおまえが駄目になるなら、それはおまえがその程度だっただけだよ。全世界のお医者さんは一人残らず都会出身なのかよ？ 違うだろ？ 本当にすごいやつは、どこにいたつてちゃんとやれる」

「でも」

学が反論しかけた矢先、落雷があつた。手の中にある彼の肩が強張るのがわかつた。憲太はまた窓の外を見てしまった。空が明るくなることに、一面を覆う雷雲の形が、黒と群青と紫を混ぜたような色で浮かび上がる。

「でも……僕のことをすごいと言つたのは、僕じゃない。大人たちや、憲太だよ」

憲太の手首が、そつと学の右手で押しのけられた。冷たい手だった。

「大人にはなんと噂されてもよかつたけど、憲太が言ってくれたのは嬉しかった。だから」

ずつと、誰よりすぐくあり続けなくてはいけないと思つた——学は打ちひしがれたみたいになされた。

「あ……僕、憲太のせいにしたね」

学はもう泣き声をたてなかつた。ただ、両手で顔を拭い続けた。雷が夜を走るたびに、唇を噛みしめ、目の下や頬に指や手の甲を押し当てる青白い顔が見えた。憲太はだんだんと不思議な気分になつた。学はクラスの中でははつきりと大人っぽい部類に入る。本校の生徒を含めてもそうだし、実際に目にしたわけではないけれど、札幌の進学塾のクラスでだつて、群を抜いて冷静で落ちつき払った雰囲気だつただろう。けれども今、自分の前にいる学は、まるで子どもだつた。雷に怯えて目を閉じ、耳をふさいでいた、遠い日のように。

そうか、嬉しかったのか。俺の言葉が。

もう何度目かわからない稲光と轟音が襲う。雷が光るたびに、幼かつたころの学が今の学と重なり、さつきまでの腹立ちはどこへやら、憲太は自分でもわけがわからぬまま、笑つていた。

「俺さ、おまえのことすごいって言つたけどさ、別におまえが勉強すごいから友達なんじゃないよ」

学の手が止まる。憲太は続けた。

「俺は学が神童だから好きなんじゃない。おまえがブサイクでも頭悪くても、おまえがおまえならそれでいいんだ」

「憲太……」

「テストの成績がすごいと思つたのは嘘じゃないよ。学が褒められるのもすげえ嬉しい。でも俺、おまえの本当にすごいところ、別にあるのを知つてる」

「え？」

「春休みさ、おまえいなかっただろ？ だから俺、ビートの間引き作業、一人で手伝わされたんだよな」

稲妻に言い葉を切り、窓の外へと目をやつた憲太を、学が遠慮がちに急かした。

「……間引き作業がどうかしたの？」

「ああ、それな。あのさあ、間引き作業つてすげえ面倒くさくてつまんねえの。おまえ、知つてた？」

（問題は5ページへ続く）

【注意】解答はすべて別紙解答用紙に記入し、問題も提出すること。

平成二十九年二月十日実施 鶴沼高等学校

「まあ、地味で遅々として進まない作業っていうよね。うちの親は好きじゃないって言った」
「だろ？ おまえは？」

「僕は別に好きでも嫌いでもない」

「俺もそうだった。でも俺さ、今年初めて、うわ、この作業つまんねえって気づいたんだよ。それまでは間引き作業を嫌いじゃないと思ってた。うんざりなんてしなかったからさ。でも、本当は嫌いだったみたいなんだ」
学は頷いた。「それで？」

「でさ、なんで今まで毎年やってきて、嫌いだって気づかなかったのかなって考えてみてさ、俺わかったんだよ」

憲太は学の胸元を人差し指で軽く押した。「去年まで、おまえと一緒にやってたからだって」

「^B虚を突かれたような学の表情が、稲光に照らされる。その光の力を借りて、憲太は学の目を覗き込む。」

「そうだよ、隣におまえが、学がいたから、『嫌い』や『つまんねえ』がごまかされていたんだ。おまえと一緒にやったから、あの間引き作業もそれなりに楽しかったんだ」

ただでさえ停電中のうえ、裸眼の学は視界がうまくとらえにくいのか、目を凝らすようにじっと憲太を見返してくる。

「僕も、嫌いだと思っただけじゃない……」

「来年おまえ、一人でやってみろよ。びっくりするほど時間経たねーから。あ、来年もおまえ札幌行くのか？」

学は特になにも答えなかった。構わなかった。憲太は心の内をそのまま言葉にした。

「とにかく俺、思ったんだ。友達ってすげえんだなあ、つて」

嫌いだったりつまらなかったりする時間も、一緒にいさえすれば、乗り切れる。

楽しみすら、見出せるかもしれない。

そういう力を持つ、自分にとってたった一人の相手。

「おまえが本当にすごいのは、そういうところだよ」

学は静かに顔を伏せた。

(乾ルカ『願いながら、祈りながら』)

問一 二重傍線部A「腑に落ちた」の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 納得した イ がっかりした ウ 驚いた エ 心配した

問二 二重傍線部B「虚を突かれたような」と同じ意味を表す慣用表現を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手に汗を握る イ 鼻につく ウ 舌を巻く エ 寝耳に水

問三 傍線部1「でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」と言った時の憲太の心情として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学の気持ちに共感し、立ち直らせようと必死になっている。
イ 学が泣いている理由は分からないが、慰めようとしている。
ウ 学に村おこしの企画を責められ、言い訳しようとしている。
エ 学の考えに納得できず、その場をやり過ぎそうとしている。

問四 傍線部2「内にくすぶる怒り」とあるが、憲太は何に対して怒りを感じているか。次の文の空欄に当てはまるように、本文中から二十字以上二十五字以内で探し、始めと終わりの五字を抜き出しなさい。

学が【 】こと。

問五 傍線部3「笑っていた」とあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 変わってしまったと思っていたが、昔と変わらない学の姿を見ることができたから。
イ いつも冷静で落ち着いている学が、雷が鳴ると子どものように怯え、面白かったから。
ウ 学が、久松先生に出会ったことをきっかけに医者を目指すようになったことを知り、嬉しくなったから。
エ 学が、自分の意志ではなく、村の大人たちの期待に応えるために勉強しているということを知り、感心したから。

〔注意〕解答はすべて別紙解答用紙に記入し、問題も提出すること。

(問題は6ページへ続く)

平成二十九年二月十日実施 鶴沼高等学校

問六 傍線部4「でも俺、おまえの本当にすごいところ、別にあるのを知ってる」とあるが、憲太が学に伝えたかったことは何か。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学には、何があっても冷静さを失わず的確な判断をする能力があるということ。
 イ 学には、どんなにつまらないことも楽しいものに変えてしまう力があるということ。
 ウ 一人では苦痛に感じられることも、学と一緒に乗り越えられるということ。
 エ 生田羽村のような田舎で勉強しても、学なら必ず夢をかなえられるということ。

問七 本文の内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 憲太は、学の将来の夢を知り、自分も将来について真剣に考えようとしている。
 イ 憲太は、生田羽村に不満を持つ学になんとかして村に馴染んでもらおうと努めている。
 ウ 憲太は、自分の言葉が学に影響を与えていたことを知り、改めて学との絆を感じた。
 エ 憲太は、学が自分に相談せず、密かに夢に向かって励んでいることに戸惑っている。

〔四〕次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

浦島太郎という男は、釣りをしている時に亀を釣ったが、かわいそうに思っただけで海に返した。その翌日、彼が再び海に行くと、小舟でひとり遭難している女性が現れた。

※1 女房いひけるは、「されば※2さる方へ便船申して候へば、折ふし浪風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、※3心ある人有りて、1自らをば、この※4はし舟に乗せて放されけり。悲しく思ひ鬼の島へや行かんと、行方知らぬ折ふし、ただ今2人に逢ひ参らせ3さふらふ。この世ならぬ御縁にてこそ候へ。されば4虎狼も、※5人を縁とこそし5さふらへ」とて、
 Aと泣きにけり。浦島太郎も、さすがに岩木にあらざれば、あはれと思ひ、綱を取りて引き寄せにけり。さて女房申しけるは、「あはれわれらを本國へ送らせ給ひてたび候へかし。これにて捨てられ参らせば、※6わらはは何処へ何となりさふらふべき。捨て給ひ候はば、海上にての物思ひも、同じ事にてこそ候はめ」と、かきくどきさめざめと泣きければ、浦島太郎もBと思ひ、同じ船に乗り、沖の方へ漕ぎ出す。かの女房の教へに従ひて、はるか十日あまりの船路を送り、故郷へぞ着きにC。

〔御伽草子〕

注釈 ※1「女房」…女性。ここでは、小舟でひとり遭難している女性のこと。

※2「さる方へ便船申して候へば」…目的地へ向かう都合の良い船に乗船したところ。

※3「心ある人有りて」…情深い人がいて。

※4「はし舟」…小舟。

※5「人を縁とこそしさふらへ」…私のような人との出会いを縁だと感じるものです。

※6「わらはは何処へ何となりさふらふべき」…私はどこへ行つて、どうなるかわからない。

問一 傍線部1「自ら」2「人」とは、誰のことを指しているか。次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 女房 イ 心ある人 ウ 浦島太郎 エ 筆者

問二 傍線部3「さふらふ」5「さふらへ」の読み方を、現代仮名遣いの平仮名でそれぞれ答えなさい。

問三 傍線部4「虎狼」は、「残忍な者」「非道な者」という意味で用いられている。これとほぼ同じ意味で用いられている別の言葉を、本文中から二字で抜き出さない。

問四 空欄Aには擬態語(擬声語)が入る。当てはまる言葉を、本文中から抜き出さない。

問五 空欄Bには「かわいそうだ」という意味の言葉が入る。当てはまる言葉を本文中から抜き出さない。

問六 空欄Cに当てはまる言葉を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア けら イ けり ウ ける エ けれ

〔注意〕解答はすべて別紙解答用紙に記入し、問題も提出すること。

(問題は7ページへ続く)
 平成二十九年二月十日実施 鶴沼高等学校

問七 女性が浦島太郎に対して求めていることは何か。それを端的に表した一文を、女性の発話文の中から探し、初めの五字を抜き出さない。

問八 本文の内容と合致しないものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女性が乗った便船は波風に襲われ、多くの乗客たちは海へ投げ出されてしまった。

イ 女性はいま人に出逢えたことを、現世ではなく前世からの縁だと述べ、涙を流した。

ウ 女性は浦島太郎に、ここで見捨てられたら海上に独りでいるのと変わらないと訴えた。

エ 女性は故郷への航路を知らないため、二人は故郷に着くまでに十数日間を要した。

問九 本文は、現代のおとぎ話「浦島太郎」のもとになった日本の古典である。では、現代のおとぎ話「かぐや姫」のもとになった日本の古典は何か。作品名を漢字四字で答えなさい。

以上